

『津国女夫池』考

— 傾城大淀の存在 —

田 中 由紀子

はじめに

『津国女夫池』は近松門左衛門による人形浄瑠璃(以下「浄瑠璃」)作品である。享保六年(一七二二)二月、大坂竹本座により上演された本作は、室町時代末期の京都室町御所を中心に展開する時代物(注1)である。足利義輝に謀反を起こす三好長慶一派に対し、義輝の家臣浅川藤孝ら善の側の人々が足利義昭を中心に据え世の中の秩序回復を図るといふ一面と、藤孝に登用されている冷泉造酒之進の養父冷泉文次兵衛の起こす因果悲劇として的一面を併せ持つ作品である。

以下は『津国女夫池』の梗概である。なお、作成にあたっては『日本古典文学大辞典』(注2)を参考にしつつ、論文の都合上、多少加筆した。

初段 永祿七年(一五六四)二月中旬の京都室町御

所、御台所の着帯の祝いの日に、朝廷から一身両頭の亀が送られてくる。亀を見て、將軍の弟足利義昭は政治の混乱を避けるために出家し、御所を出て行く。一方兄の將軍足利義輝は、三好長慶の養女になった傾城大淀を御所に迎え入れる。懷妊中の御台所はそれに耐えられず、御所を落ちる。

二段目 義輝は大淀の機嫌をとるため、側室たちを手討ちにする。そこへ御台所殺害の疑いのある咎人を松永弾正が連れてくる。浅川藤孝は保護していた御台所をその場へ連れてくるが、松永は咎人の首を落とし、三好長慶は言葉巧みに義輝に取り入る。大淀は藤孝に斬られながらも長慶の謀反を伝えるが、時すでに遅く、義輝は討たれる。

三段目 浅川藤孝の命を受け、冷泉造酒之進と清滝は御台所を護りながら摂津へ向かう。途中、御台所は若君を出産する。無事に摂津にいる造酒之進の父

母の元へ着くが、そこで清滝の実の父母が造酒之進の両親である事がわかる。すでに夫婦となつていた造酒之進と清滝の二人は身投げを決意する。造酒之進の父文次兵衛は二人を救おうと、友であり造酒之進の実父である駒形一学を闇討し、一学の後妻を娶つた次第を告白する。文次兵衛がかつての夫一学の敵と知つた妻——清滝の実母であり、造酒之進の養母である——は、現在の夫文次兵衛に一太刀だけ報いる。そしてそのまま二人は池に入水して果てる。

四段目 それより半年後の晩秋、浅川藤孝らは出家して慶覚と名乗る義昭に、足利家のための還俗を勧める。慶覚は還俗を了承しつつも一人その場を抜け出し、かつて御所のあつた場所で眠りにつく。そこで、慶覚は夢中に義輝から足利重代の小袖の鎧と星兜を得る。

五段目 永禄十二年(一五六九)五月下旬、還俗した義昭の率いる大軍は三好長慶の館に討入り、三好一派を滅ぼす。

『津国女夫池』はこれまで、三段目の文次兵衛を中心に論じられてきた。本作が時代浄瑠璃であることを考えると、いわゆる「三段目の悲劇」という構成から(注3)、三段目に足利家再興のための犠牲となる者が出るのが定型である。しかし、『津国女夫池』において、実際に起

こる悲劇は文次兵衛の因果悲劇であり、作品世界の秩序回復に直接影響を与えることはない。これでは公である足利家の話の中で私事の文次兵衛の話が語られる必然性があるとは言えず、結果作品の統一性がないとされてきた。その上で、先行研究では『津国女夫池』の中で世話悲劇的要素の強い三段目のみを、文次兵衛を中心として取り上げてきた。三段目以外に登場する足利家関係の人物は、文次兵衛とは直接の影響関係にないため、ほとんど触れられることはなかった。

それに対し、私が注目したのは、初・二段目に登場する傾城大淀である。大淀は、先行研究では殺人を犯す残酷な人物と言われてきた。しかし大淀の言動を一つ一つ丁寧に見ていくと、それは表面上の単純な理解でしかないということが分かる。何が大淀を殺人者に追いやるのか、またそれが作品に与える影響とはどういったものなのかを以下に見ていく。

なお今回使用したテキストは『近松浄瑠璃集 下』(新日本古典文学大系、一九九五年、岩波書店)であり、本文の引用はすべてこれによつた(ルビを省略するなど、一部表記を改めた)。

第一節 大淀——輿入れからその死まで——

「津国女夫池」の主筋は、長慶謀反と足利家の再興である。謀反を計画する長慶は、義輝の信用を得て油断させ、義輝を討つ機会を狙っていた。大淀は、元は傾城であるが長慶の養女となり、義輝に輿入れする。長慶の計画は、大淀を輿入れさせることにより義輝を油断させ、義輝を討ちやすくすることだったのである。そして大淀は御所へ入ると突然、手討ちになる側室たちを見て笑うという恐ろしい面を見せる。その結果、大淀は義輝を護ろうとしていた藤孝により、殺される。しかし死の間際、大淀は長慶が義輝を討とうとしていることを藤孝に伝えなかったのだという。人の手討ちを見て笑うという行動は、義輝の命を助けたかったという大淀の心がさせていたものだったのである。

鎌倉恵子氏は、大淀が妬己を連想させる残酷な行爲を行つた理由を告白しても、それは作品の展開に影響を与えていないと言う(注4)。また久堀裕朗氏は、大淀は義輝を救う善の人を探すためには言うものの殺人という悪を犯す、と言っている(注5)。

たしかに大淀は人を殺しているとも言えるのだから、「悪」である。二段第一場において行われた大淀の真意

の告白も、結局義輝の命を救うことには繋がらないのだから、作品の展開に影響がないと言われてもしかたがない。

しかし、大淀が「悪」であるというのは、作品の表面上の理解に過ぎないのではないだろうか。もう一步踏み込んで、大淀に迫ってみたいと思う。

具体的に大淀の行動を、順を追ってみていくことにする。初段第二場で造酒之進が、「義輝公御寵愛の傾城大淀と申女。三好入道が九条の町を請出し則彼が娘にして。今暮御所へ入はづに相極る」と言う。この科白を聞いていたのは義輝の正室である御台所、側室の梅が枝・白菊・初雪、御台所の腰元清滝である。造酒之進の科白を受けて、梅が枝が次のように言う。

「：傾城はぞんざいの固まり。近ひ証扱は帯の祝ひの折からも。殿様を泊て戻さず。義昭様の御出家も皆其傾城づらめから。九条に居る内さへあれじや物。御所へ入たらほんにくのさばり返て手に入自慢。御台様がふうんと万事を鼻であしらはば。十度に一度はお腹も立たいで何とせう。其時お悔なされても俄に愠気も成まいし。追出そふにも動くまいしお修羅の種を見る様な。：」

傾城は礼を乱す者であり、その証拠に義輝は九条の遊廓へ行くと帰ってこず、御台所の着帯の祝いの日に義輝

の代理として出席した義昭は、謀反を企てているという疑いをかけられ、出家する事になった。遊廓にいる間からこの有様では御所へきたらどんな事態になるか、義輝を中心とした嫉妬を原因とする悲惨な争いが起こることになるでしょうというのが梅が枝の考えである。

続いて、初段第三場の大淀輿入れの場面である。義昭の臣である海上太郎が大淀の乗った輿を襲うと、中から大淀と共に義輝が出てきた。大淀は義輝の袖にすがりついている。怒る義輝に、海上太郎は謝罪しつつも大淀をなじる。大淀絡みの一件で主である義昭が出家する結果になったことに、相当腹を立てている様子である。引用箇所は、海上太郎に、義昭を出家させたのだから大淀も髪を切れと言われた後の大淀の様子である。

大淀もおろく／＼涙。「道々申も爰のこと。御台様への憚り。外に数多。お手かけ衆。いかな賢女も嬉しかるまじ。外の謗りはお名の恥。御所の中へはわしやいや／＼。是から戻して下さんせ。徒で去にますさらばや」と。立んとすれば「待て／＼。推参な小丁稚。摂政関白も冠下らるゝ此義輝。国家の政道おのれに教へらるべきか。余人の見せしめ。岩成馬淵彼奴ぶて／＼」。

義輝は大淀の言は聞かず、海上太郎を黙らせて問題を握り潰している。特別積極的な理由で御所入りを拒んで

いたわけではない大淀は、義輝に流されるまま御所に入つていったのだろう。抵抗したような様子は描かれていない。この場面の視点は海上太郎のものである。その場に一人残された海上太郎の眼には、御所へ入った大淀の姿はもう見えない。

場面は替わり、二段第二場、酒宴の座での義輝の様子である。

義輝公の御声高く。「昨日迄は傾城の大淀。今日是我御台所何事が氣に入らぬ。ヤレ皆寄て機嫌取れ」と廻らぬ舌を廻り声。

昨日までは傾城、今日からは將軍義輝の正室という身分なのに何が氣に入らない、皆大淀の機嫌を取れと酒に酔った廻らない舌で命令を出している。大淀の機嫌の悪い表情を想像できるが、この科白を言っている義輝はすっかり酔っている状態であり、発言をあまり信用できないということに注意しておく必要がある。

この後、大淀の機嫌直しにまず白菊が斬られる。その様子は、館の表の間と奥の間との間に設けられた、中門の隙間から白菊を見つめる梅が枝と初雪の科白によつて観客に伝えられる。

「なふ初雪様。地獄／＼と来世の様に思ひしが。大淀は鬼の大将あの門の彼方が無間地獄。馴染みの白菊殿。最期を覗いていざ回向」とおつ／＼覗く門の

隙間。「梅が枝様あれ見さんせ。白菊様を引据て。繩を解くは助くるか。いや／＼両の手を引張つた。主税の介が後へ廻る何とするぞ」と見る内に。どうと響く太刀音。「なふ悲しや。両の手を切落した。瘡が胸へさしこんでわしや動かれぬ。ア、南無阿弥陀仏弥陀仏」と。そゝろに震ひわな、けり。／＼「アレ初雪様。今のを見て大淀めが笑ひくさる。アレ殿様へ抱付た」と告ぐる内。重てどうと響く太刀音。「梅が枝様今のは何ぞ。」「いとしや首が」と計にて。身を投臥して泣るたる。

猿轡をはめられた白菊が義輝と大淀の前に引き出されていく。身体を縛つた繩が解かれ、左右から白菊の腕を引つ張る者がいる。岩成主税の介はまず後ろから白菊の腕を斬り落す。梅が枝と初雪には見るのも辛いこの状況で、大淀は笑つていた。ただし大淀の科白はなく、この場面の視点も梅が枝のものであり、大淀の立場からは様子が語られていない。

では最後に、大淀が藤孝に斬られる場面である。白菊に続き梅が枝と初雪も斬られた後、厩御台所殺害の咎人の詮議が行われる。詮議の際に義輝の信用を揺るぎないものにした長慶が、義輝と共に館の奥へ入っていく。以下はその場に残つた藤孝の様子である。

「サア悪人道が退出を待請。手を擦らせんか但御前

の対決か。藤孝が「所懸命」と駆出駆入肺肝をくだき待所に。奥より出る女の影「ヤア傾城の大淀。」「左京様。藤孝様」と尋ぬる声。「藤孝是に」と立寄りま。左の大腹一太刀ぐつと刺すも抉るも一度の早業。(二段第一場)

藤孝が長慶とどのように決着をつけようかと思案しているところへ、大淀が藤孝を捜しながらやつてくる。大淀の呼ぶ声に返事をしつつ、出会い頭に藤孝は大淀に一太刀浴びせる。藤孝は大淀に対し、鬼の変化でもないだろに人を殺す事を好んではないだろう、長慶の味方として御所内で人を殺させていたのではないかと問うと、大淀は次のように答えた。

「ア、／＼藤孝様。お名を呼で来るも。なふ其ことを申さん為。在京の武士御所中の侍。皆入道に一味して。時節を見て。義輝様を殺さん／＼と。様々怖いこと共。其お氣も付かずうか／＼と。御命は。風吹夜半の灯火。ア、危な。ア、危など。危ぶむ私。心の。やる方なさ。藤孝様に知らせたいとは思へ共。お側を離れお次の間へも出されず。いつそ私が悪人に成。愛想尽きて追出さるゝか。御意見申人あらば。其時万事打明けんと女のはかない知恵立て。……」(二段第一場)

義輝が狙われていることを藤孝に知らせたくてもその

手立てがない。大淀自身が御所を追い出されるか、誰か近くまで来てくれなくてはしようもないと思ひ、苦肉の策で人を斬らせる悪者になり、諫める人が現れるのを待ったという。大淀は長慶の狙いを藤孝に伝える事が出来、満足して死んでゆく。

「…情なや蚊を殺し。蠅を殺すも罪咎。まして同じ人間悲しや思はぬ殺生と。自づから浮かぬ顔色を。機嫌直しと又殺さるゝ。其度くゝの人の恨積る因果の悪業。生ながら額に角も生へ。身に鱗もできずして今日迄君に思はれしは。冥途で苦患見せんとの仏の罰か情なや。卑しいさもしい勤の女。將軍様に枕を並べ。文武二道の藤孝様の御手にかゝり。何の命が惜しからふ。私ゆへ死んだ人々の。恨の念も晴るゝ、為鬨り殺しにして下さんせ。御台様へ言訳し。御憎しみを許して給へ返すゝも殿のこと。くゝを」と計にてついに。はかなく息絶へたり。(二段第二場)

同じ人間を殺した報いは冥途で受けることになりましょう、藤孝様の手にかかりどうして命が惜しいでしょう。私のせいで死んでいった人たちのためにも私を鬨り殺しにして下さい。御台様へ真実を伝え、ともかくにも義輝様をお守り下さいと、大淀は義輝の身を案じながら息を引き取った。

この場面では、大淀の考えが科白によく表れている。作品中大淀が、唯一場の主導権を持つて語っている場面といえるであろう。

この、大淀最後の場面について、渡辺保氏は次のように述べている。

藤孝に刺された大淀は、姐己の役を演じて大勢の人を殺させたのは、そうすれば藤孝が諫言にきて、將軍を救ってくれるだろうと思つたと告白する。これはいかに全て周囲が敵だつたとしてもムリなこじつけのような気がする。

また、渡辺氏は二段における大淀の変貌を次のように説明されている。

昔、中国殷の紂王の寵妃姐己は笑つたことがなかつた。ところが人を殺したのを見て笑つたので、紂王は姐己を笑わせるために次々に罪もない人間を殺し続けて殷の国はついに滅亡した。その伝説を真似た大淀御前が人を殺すと喜んで笑う。前の幕の大淀とは人が変わったような残酷さである。(注6)

大淀が突然「人が変わったような残酷」な顔を見せるということ、そしてその展開が「ムリなこじつけ」のよう感じられるということ、渡辺氏は否定的に捉えておられるようだが、私はそうは思わない。大淀の行為を「姐己に勝りこそすれ劣りはせじ」と姐己に形容したの

は梅が枝であり、大淀自身ではない。大淀は「いつそ私が悪人に成」と言っているだけである。梅が枝らの大淀に対する認識と、大淀本人の人物像と、何か違いがあるのではないか。その点について、次節で詳しく述べていきたい。

第二節 大淀の笑い——快樂と苦惱——

前節でも述べたが、大淀が登場する場面のうち大淀の視点から科白が語られているのは、大淀が藤孝に斬られた後の場面のみである。その点にも関連しているが、大淀について、他の人物とは明らかに異なる注目すべき点がある。まずそのことから触れておきたい。それは大淀に関する地の文において、二段目では大淀の表情を記した箇所がないということである。大淀以外の人物においては必ず表情を記した箇所があるが、大淀にはない。具体的に、大淀に関して記された地の文をすべて挙げてみる。なお、「」内が地の文である。

まず、大淀輿入れの場面である。海上太郎が義輝と大淀の乗った輿の戸を蹴破った際、義輝の「跡に続いて大淀が。生たる心もなき沈み。御袖にすがり立出れば」と、輿から出てくる。海上太郎になじられ「おろくく涙」の大淀が、遊廓へ帰りますと言った後「立んとすれば」、義

輝に止められる。(初段第三場)

白菊が岩成に斬られた様子を見、御所を逃げ出す算段をしている梅が枝と初雪の後ろに義輝が「大淀諸共ましくく」て、梅が枝たちの話を立ち聞きしている(二段第二場)。長慶といかにして決着をつけようかと思案している藤孝の所へ、御所の「奥より出る女の影」、大淀が藤孝を探しながらやって来る。出合い頭に藤孝は大淀に「太刀浴びせる。大淀は藤孝に刺され、「うん」と仰けに七転八倒」する。致命傷を負いながらもすべてを藤孝に話した大淀は、傷のために「ついに。はかなく息絶へたり」と死んでいく。(二段第二場)

大淀についての地の文は以上である。初段では大淀の表情が読み取れる表現があるが、大淀の奇行が始まる二段第二場では大淀の表情は地の文からは読み取れない。それでも観客は初段に引き続き二段目においても、大淀の表情(感情)を把握しているつもりになれる。その理由は、大淀の表情が周囲の者の眼を通して、他者の科白という形で作中に表現されているからである。

他者の科白で、という形であっても、作中に大淀の表情を表現した箇所があるのなら表情があることにかわりないと思われるかもしれない。しかし、ここに大きな仕掛けがあるのである。

白菊が岩成主税の介によって斬られた場面を思い出し

ていただきたい。この場面の前後を含め、具体的に引用しながら詳しく見てみる。

義輝は大淀に対して「昨日迄は傾城の大淀。今日は我御台所何事が気に入らぬ」と言う。言伝を持って表方へ走る清滝は、「又お傾城様の機嫌が損ね。今朝からけがなにつこり共せず。それ故例の機嫌直しの御成敗が又始まります」、「お伽もむやくしからふが。辛抱が大事傾城殿に睨まれて。憂ごと見せて下さんすな」と、梅が枝と初雪に話している。何の罪もない白菊が斬られると知った梅が枝は、「大淀は鬼の大将」と言う。そして白菊が斬られる様子を見ながら「アレ初雪様。今のを見て大淀めが笑ひくさる。アレ殿様へ抱付た」と言う。その後、大淀のことを娘己だとなじりながら御所を逃げ出す算段をしていた梅が枝と初雪は、義輝の不興を買い、斬られることになる。そして梅が枝が岩成に斬られる様子を見ながら、義輝は「大淀見てかおもしろいの」と言った。

この間大淀は一言も言葉を発していない。大淀は一言たりとも、人が斬られるのを見るのは楽しい、とは言っていないのだ。にもかかわらず大淀のこの笑いは、観客には梅が枝と同様に、人が斬られることに快楽を感じ笑っていたように受け取られる。

これはどういうことなのだろうか。観客は梅が枝らの視点で作品展開を見ている。その際、作品の客観的な情

報だけでなく、作中人物の考え方・見方も観客は受け入れている。加えて、観客に対して自らの考えを明かすことなく行動している大淀より、わけも分らないまま状況に流され見つけることしかできない梅が枝の立場の方が、観客に近い。当然ながら観客は、梅が枝と同じ結論に至る。

ここで、大淀に対する梅が枝の見方を整理してみる。まず初段第二場において、大淀は義輝を中心とした悲惨な争いの種になるだろうと言っている。また二段第二場で、大淀の機嫌直しという理由で白菊が岩成主税の介に斬られようとしているとき、「大淀は鬼の大将」だと言っている。しかしよく注意してみると、これら梅が枝の科白はどちらも大淀をよく知った上での科白ではない。しかし、梅が枝の科白にある義昭の出家と大淀のために人が斬られているという状況は事実である。観客は梅が枝による大淀の評価を、疑うことなく受け入れることになる。

しかし大淀が藤孝に斬られた際の告白から、後になって大淀のこの奇行が愛する義輝を護ってくれるであろう「善」の人物を捜す苦肉の策だと判明する。そうすることによって大淀の見せた笑いは、悲痛な笑いへと観客の記憶の中で変化してゆくののである。

大淀は初段第三場に、御所へ入れば非難されるだけだ

から御所へ入るのは嫌だという消極的な科白がある。この、御所へ入ることを拒む大淀は、直後の義輝の科白と行動で打ち消される。そして、大淀自身の科白で大淀の人柄を印象付ける事が出来ないまま、話は二段目へと移っていく。

先に、渡辺氏が大淀について「人が変わったような残酷」な顔を見せると述べておられると言ったが、それはこの初段第三場と二段第二場の様子の違いを指している。しかし、おかしいのは二段第二場の大淀奇行の場の大淀であり、初段第三場と二段第二場大淀最後の場の様子からは、大淀が同じ人物であることがわかるだろう。

二段第二場の大淀奇行の場の特異さは、大淀の表情や行動が他登場人物の科白の中にあるのみであるということだけではない。この場面では、大淀の科白は一切ないのである。表情もなく何も語らない大淀に、観客はもの見事に惑わされていたということになる。大淀を見る周囲の登場人物の眼が偏っていたために大淀の変化が特異なものに映り、理解されなかつたのである。しかし、科白がなく、表情や行動が他の登場人物の眼を通してのものであったという仕掛けに気付いたとき、大淀の人物像は一貫したものとなるのである。

第三節 善悪の境目——大淀と文次兵衛——

私は、大淀は他登場人物と違い、表情の表現が地の文でなく他者の科白の中にあると述べた。そしてそれは大淀の人間性を観客に錯覚させる効力を持つている。では大淀の人間性を錯覚させることの意味は何か。そこに、三段目に登場する文次兵衛を描く重要な要素が隠されているのではないか。この点について、以下考察していく。

『津国女夫池』ではまず二段目において、己の行為が「悪」だと認識しながらも愛する義輝のために行動する大淀が描かれる。次に己のうちに悪を覆い隠した文次兵衛を、三段目で描く。これは、一見して悪である人物の内に善心が秘められている場合と、一見すると善なる人物の内に悪心がある場合と出ることが出来る。

三段目のみ見た場合、文次兵衛の話は単に一人の男の懺悔である。しかし初・二段目の大淀の存在が、文次兵衛とは異なった「悪」の形を同じ作品の中に示し、「悪」への理解を複雑にさせる。一つの作品で異なる「悪」を内包した二人の人物が描かれることで、単純でない人間性が表現されている。

ここで、大淀と文次兵衛の相違点と共通点をまとめておく。初めに、相違点について述べる。

大淀は傾城である。周囲から見ると悪だが、それは義輝の命を救うために悪になつたのである。複数の人を他者の手によつて斬らせ笑つてみせる。しかしその行為を諫言する者は現れず、人間を殺した事に苦しむ。事態は短期間で結し、最後は他者に斬られ、斬られた後に真意を告白する。一方文次兵衛は武士である。周囲から見ると善だが、彼は自らの欲のために悪に手を染める。そして恋敵である駒形一学を自分の手で斬る。その結果、思い通りに妻を手にしたものの、夫婦が敵同士であることに苦しむ。そして二十年以上悩みと苦しみが続くことになる。最後は妻に続いて自害する。それは秘密を告白した後、形ばかりの敵討ちに妻に一太刀斬られた後のことであつた。

女性である大淀は愛する他者のために悪になり、悪になつた罰を受けるがごとく藤孝に斬られて死ぬ。男性である文次兵衛は愛すべき己のために悪になり、いつか下されるであろう罰に怯えて時を過ごし、最後は駒形一学の息子である造酒之進に討たれたという願ひは叶わなのまま、妻の後から入水自殺し死ぬ。

なお、死後の救ひは大淀のみ描かれており、文次兵衛はない。二段目で死んだ大淀は、殺した相手に恨まれていた。怨霊となつた梅が枝らに苛まれる様子が四段目において描かれる。けれど義昭の唱えたお経により、梅が

枝らと共に大淀は成仏することができ、救われる。

大淀と文次兵衛に共通する点は、周囲の人物に本質を理解されていないこと、権力を持つていないこと、満足して死んでいくこと、正しいとはいえないものの愛情ゆえの行為だつたということ、である。

満足して死ぬという点について、大淀は藤孝に真意を伝えているので満足しているということは理解してもらえらるだろう。では文次兵衛はというと、造酒之進に討たれて死ぬという願ひは叶わないものの、駒形一学を殺した罰を受けることは自らが死ぬことにより達せられる。思い描いていた形とは違うものの、「死」により文次兵衛の心は罪から解放されるのである。

また、正しくはないが愛情ゆえの行為だつたという点について、大淀が義輝を優先するあまり他を犠牲にする行為は、正しいとはいえない。大淀自身が作中において人を殺したことに苦しんでいることから、そのように言うてよいだろう。そして文次兵衛も、妻を求めるあまり、友人である駒形一学を殺した。大淀も文次兵衛も、自身にとつて大切だと思ふことを優先したために、他の部分に歪を生じさせてしまったのである。

このように大淀と文次兵衛を見比べたとき、一体何が見えてくるのか。その点を考えるために、作品構成について少し触れておきたい。

まず、大淀の話が初段第三場と二段第二場においてなされる。大淀の話が一通り終了した後、三段第二場、三段第三場において文次兵衛の話が展開する。私は、大淀の話語り終えて改めて文次兵衛の話語りという展開に注目している。二つの「悪」が同時進行で語られないという点で、これは「悪」のモチーフを繰返していると言える。繰返すことで注目する点が明確になり、また対比することでテーマがより掘り下げられていく。大淀の話が文次兵衛より先に語られていることには重要な効果があるのである。

複数の人を斬らせ笑っていた大淀の行為は派手で、強烈な印象を受ける。また二段第二場は室町御所内の出来事であり、登場する女性たちの衣装も華やかであっただろうと想像される。義輝の命のためとはいえ、大淀の行為は凄惨で、彼女の死に観客の涙はない。先行研究で大淀に関する言及が少ない理由の一つだろう。一方文次兵衛は大淀の場合とは正反対である。一人ひっそりと一学を闇討ちし、その事実をひた隠しにしてきた。明るい御所の中で目立つように行動した大淀とうって変わり、文次兵衛は闇の中を生きてきた。文次兵衛の話の前にある大淀の話が明るく派手であればあるほど、己のために闇に生きることになった文次兵衛の半生のやるせなさが、際立つてくるのである。

いくら愛する者のためとはいえ、一人のために他を犠牲にすることは許されることではない。しかし大淀は義輝の側室をはじめ御所内の者を数人死に追いやっていく。また文次兵衛は造酒之進の実父駒形一学を殺害した。大淀と文次兵衛の共通点として前述したが、「愛する者のため」という動機のみ眼をやれば、大淀と文次兵衛の行動の発端は同じところにある。これは盲目的な愛情といえるものだろう。では文次兵衛ばかり注目される理由はどこにあるのだろうか。眼に見えて悪であれば、誰もがその人物を悪い人物だと認めるだろう。その人物の真意がどこにあるとも、大淀に対するそれと同じで、同情は得られない。ならば文次兵衛のような隠された悪はどうか。文次兵衛の本質も大淀と変わらない。大淀が悪ならば文次兵衛も悪と言ってしまえるだろう。しかし善だと思っていた人物が悪になるとき、人は単純に悪を罰すという公式を使えない。文次兵衛に対する造酒之進、清滝、そして妻の対応がそれを物語る。

文次兵衛が駒形一学を殺したと告白したとき、駒形一学の息子である造酒之進は呆然とし、文次兵衛の娘である清滝は造酒之進に文次兵衛を討たせはしないと様子を窺う。妻は驚き言葉もなく、思わず座り直す。文次兵衛が仔細を語り終えたとき、造酒之進は文次兵衛を討つことは出来なかった。駒形一学の敵を討ってもらおう契約で

文次兵衛と夫婦になつた妻は、結果的に自害という道を選ぶ。

隠された悪である文次兵衛に対し、厳しい眼でその罪に判断を下す人はいない。そのため文次兵衛の悲劇は、文次兵衛に対する愛情を持つて、これまで何度も論じられてきたのだろう。

悪の仮面を被つてでも信じる者のために命をかけた大淀(他者を優先)と、自己の欲のために悪へ足を踏み入れた文次兵衛(自己を優先)という二人の生き方は、同じ作品の中で語られることにより、鮮明さを増したといえる。科白が極端に少なく、感情の表れない大淀と、科白は多く心理的に追い詰められていく様子のわかる文次兵衛。大淀は文次兵衛より先に登場し文次兵衛より先に舞台から退場するため、文次兵衛と直接関係しない。だがしかし、大淀はけして作品展開と無関係な存在ではない。大淀に関する表現は意図を持ってなされたものであり、大淀はこの作品において重要な位置を占める登場人物である。

おわりに

大淀の科白は、全編を通してたった二回だけである。

初段第二場の大淀輿入れの場面における科白と、二段

第二場の藤孝に斬られた際の科白だ。たった二回、だがこの数少ない言葉の中に、大淀の想いは込められていた。

しかしそうはいっても大淀は、感情の掴みづらい人物である。そんな中、梅が枝らが「悪者」のイメージが作品上に強く表れ、それが大淀の真の姿なのだと観る者は錯覚してしまう。近松は他登場人物を使って大淀の偽の人物像を作っているわけではないが、だからといって「真実の大淀を表現しているわけではない。真実と偽りの間で、誤解された大淀を描いているのだ。」

登場人物の科白はその人物の主観であつて、絶対的なものではない。その虚をついた仕掛けといえるだろう。

大淀は義輝に対して謀反を企てた長慶と同じ「悪」ではなかった。しかし、だからといって大淀が「善」かという点、それは違う。義輝を護ることが目的とはいえず、殺人という悪を犯したからではない。大淀の最終的な目的である義輝を護ることが達せられなかったからでもない。大淀は、「善」だとか「悪」だとかに二分されない存在だからである。

近松は作品作りに対して、「総じて淨るりは人形にかゝるを第一とすれば、外の草紙と違ひて、文句みな働きを肝要とする活き物なり」(注7)と言っている。このような信条のもとに作られた作品の、小さな部分にまで注目したとき、登場人物が「生きた人間」として息づいてい

ることがわかる。

紙幅の都合上今回は論じなかったが、造酒之進も人間味のある登場人物である。造酒之進は二段目では理詰めで論を組み立てる確実さを持つて描かれている。だが、三段目で婚約者の清滝の両親が文次兵衛とその妻であり、造酒之進が父と思つていた文次兵衛が実は造酒之進の実父駒形一学の敵と知ることになる。このような三段目では、動揺し冷静さを欠く造酒之進が描かれていく。

登場人物の生い立ちや置かれていく状況がわかると、その登場人物の背負うものが見えてくる。そうしたとき、登場人物の作品における存在感が明確になり、作中で現実味を帯びてくる。

『津国女夫池』はこれまで、文次兵衛について論じられ、他登場人物が取り上げられることはほとんどなかった。しかし今回私を取り上げた大淀をはじめ、造酒之進や清滝、海上太郎など、作品上重要な人物は文次兵衛以外にもいる。『津国女夫池』は文次兵衛の因果悲劇という評価に留まることなく、作品全体の構成や人物描写にわたつても評価できるものなのである。

注

- (1) 時代物とは、「近世以前の歴史上の事件を扱うもの」である（『日本古典文学大辞典』内山美樹子氏執筆、一九八四年、岩波書店）。

(2) 白方勝氏執筆、一九八四年、岩波書店。

(3) 時代浄瑠璃では正徳五年（七一五）初演の『国性爺合戦』以降、三段目に作品世界の秩序回復を目的として犠牲となる人物が現れることが、作品展開の主流となる。これを「三段目の悲劇」という。

(4) 鎌倉恵子「近松時代浄瑠璃三段目考——『津国女夫池』を中心に——」（『近松論集』巻号八、一九八六年六月）。

(5) 久堀裕朗「『津国女夫池』——時代悲劇と世話悲劇の接点——」（『國文學』二〇〇二年五月）。

(6) 渡辺保「近松物語——埋もれた時代物を読む——」（二〇〇四年、新潮社）。

(7) 『近松門左衛門』（江戸人物読本、一九九一年、ペリかん社）所収の『難波みやげ』を参照した。

（日本文学科 二期生）